

令和3年 3月 31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都世田谷区太子堂1-7-57
管理機関名 学校法人 昭和女子大学
代表者名 理事長 坂東 真理子

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年 4月 10日（契約締結日） ～ 令和3年 3月 31日

2 指定校名・類型

学校名 昭和女子大学附属昭和高等学校
学校長名 真下 峯子
類型 グローカル型

3 研究開発名

「都市型社会課題への発信力を育成するクロスサービスラーニングプログラム」

4 研究開発概要

本校では「世の光となる」「Think global, Act local」を合言葉に、様々な課題を世界規模で考え、地域規模で実践していくグローバルな人材の育成を進めてきた。それをもとに、本事業では育成するグローバル人材像・人物像を、

- ①「『SDGs』・『都市型社会課題』への関わりを軸に、グローバルな視点とローカルな視点を備えた世の光となれるグローバル人材」
- ②「他者との協働を通じて、主体的に課題の解決に向かう責任感と意欲あふれる人材」とし、「アカデミックスキルトレーニング」（「世田谷研究(世田研)」、「グローバルサーチ」の2つ）、「LABO 研究」、「サービスラーニング」、「キャリアビジョン」の段階的なプログラムを通じて、他者との協働のなかで持続可能な共生社会の実現に向けたアクションプランを提案するグローバル人材の育成をめざすことを目標とする。

活動の主軸となるのは地域型探究学習プログラムである「LABO 研究」「サービスラーニング」で、地域活動やボランティアへの参加、企業・商店街との連携、社会への提言などを実践の舞台として、世田谷区が抱えている都市型の社会課題や、ジェンダーなどのグローバルな課題の解決策提案をめざす活動である。「LABO 研究」はグローバルな社会課題をテーマ

とするグローバル課題解決を志向する研究、サービスラーニングは世田谷区の抱える課題を解決するローカルを志向する活動として位置づけ、生徒は「LABO 研究」「サービスラーニング」のどちらかを選択（LABO 研究は選抜制）して探究活動を行う。

この活動に、ローカルとグローバルの両視点を加えることで、グローバルな視点で課題解決の実践に取り組める人材の育成につなげるのが本プログラムの構想である。地域の魅力や課題を探る「世田谷研究」を通じて、地域課題解決に必要な知見や方法論を学びながら地域の課題を自分事として捉えることのできる「ローカルの視座」を育む。また、海外フィールドワークである選択制国内外研修旅行と、その事前事後の調査学習（「グローバルサーチ」）によって、海外での知見や SDGs への理解などの視野を広げて考察ができる「グローバルの視座」を育む。地域課題解決型探究学習にグローバルな視座とローカルな視座を交錯（クロス）させて思考を深めることによって、体験に基づく学びや課題意識、広い視野に目を向けた考え方を、地域的な視点・課題意識で再構成させていくようにする。このクロス化によって、より広く深い視野をもった実践的な学びを構築し、グローバルな視点で課題解決の実践に取り組める人材の育成につなげることができると考える。さらに、高校3年次に「キャリアビジョン」の時間を設定し、探究での学びを活かして将来像を描く活動を行う。3年間の系統的な探究のカリキュラムを構築し、生徒自身が主体性をもって世の光となるようとする人材を育成する系統的な探究学習プログラムである。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

・学校設定教科・科目	開設している	・	開設していない
・教育課程の特例の活用	活用している	・	活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
岡田 篤	世田谷区 副区長	行政機関
小田桐康文	公益財団法人世田谷産業振興公社 副理事長	協力機関
興梠 寛	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事 昭和女子大学特任教授	学識経験者
真下峯子	昭和女子大学学長 昭和女子大学附属昭和高等学校 校長	学校経営責任者
保坂邦夫	学校法人昭和女子大学 理事長補佐	管理機関

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
公益財団法人 世田谷区産業振興公社	近藤賢二 理事長
社会福祉法人 世田谷ボランティア協会	横山康博 理事長
世田谷区 生活文化部 まちづくり推進係	石井貴和 係長
世田谷区 経済産業部 産業連携交流推進係	佐藤智和 係長
三軒茶屋銀座商店街振興組合	飯島祥夫 理事長
しもきた商店街振興組合	長沼洋一郎 理事

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	會川 恵志	昭和女子大学附属 昭和高等学校	非常勤
海外交流アドバイザー	—	—	
地域協働学習実施支援員	本杉 香	明大前商店街振興組合代表 明大前ピースメーカーズ代表	
〃	松田 妙子	世田谷子育てネット代表理事	
〃	松田 京子	世田谷区生活文化政策部国際課	
〃	太田和 信也	世田谷区清掃・リサイクル部事業課	
〃	竹内 明彦	世田谷区環境政策部エネルギー振興課	

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程							
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム構築	世田谷区・世田谷区産業振興公社と相談・運営指導委員を選出			地域協働学習支援員協力依頼（計8名）				
コンソーシアム運営指導委員会						実施		
公開講座の実施				国境なき医師団と内容を協議			実施	実施

(2) 実績の説明

- ① 世田谷区と世田谷区産業振興公社に運営指導委員会への参加を依頼。副区長など構成メンバーを選出した。委員会は令和3年1月25日に実施した。
- ② アンケート調査結果に基づき、生徒が関心を持つ地域課題を抽出。5つのカテゴリーに分類し、世田谷区から地域協働学習支援員の推薦を受けた。
- ③ 各支援と面談し、本事業の目的を説明。カテゴリー別の講演とサービ斯拉ーニングの指導を依頼した。
- ④ 海外研修ができない状況が続いたため、紛争地で人道支援を行う国境なき医師団の事務長・看護師による講演会を企画。全国の私立高校にも参加を呼びかけた。
- ⑤ 講演会は2月と3月にオンラインで開催。500人以上の高校生が聴講した。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程													
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
LABO 研究		オンライン課題	←						オンライン研修	企業訪問・地域訪問			→	
サービスマーケティング (数字は地域での活動・講演会など)		オンライン課題	←										→	
SDGs 講演 AST (全体向け)・ アカデミック講演会		1回				2回		4回	4回	7回	3回		1回*	1回*

*4月～5月はオンラインおよび課題配信によって在宅ワーク形式で実施

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

A. アカデミックスキルトレーニング (AST)

- 1年次前期に研究スキル育成プログラムを設定し、探究スキルの習得を図っている。
- ・ロジカルシンキングと課題の立て方 (全2回)、情報収集・情報の分析と活用、論理的・批判的思考とまとめ方、をオンラインで実施した。
- ・1年生には探究学習への意識づけのために主体的学習者育成プログラム(全4回)、2年生には地域との協働意識を育むため協働的学習者育成プログラム(全4回)をそれぞれ実施した。
- ・9月には「SNS・動画作成」をテーマに昭和女子大学教授天笠邦和氏によるオンライン講演を実施し、現地に行けない生徒の活動支援につながるようにした。

B. ローカルプログラム

本プログラムで実施する「サービスマーケティング」は、地域が抱える課題の発見と解決に向けて、生徒自身が地域と協働してアクションプランを策定する地域参画型探究学習である。1年次にボランティアを通じて地域課題の発見・把握と研究課題の設定を行い、2年次には地域課題解決のためのプラン策定と提案・実施する。

- ・本事業で構築したコンソーシアムの強みを生かし、課題の発見、ボランティア活動、地域課題の解決案実施にあたっては自治体や企業、大学との協力関係のもとで生徒の活動を支援できるようにした。
- ・今年度はコロナ禍により、地域での活動が大幅に制限された。4・5月は学部での活動ができず、オンラインにて課題を配信し、地域課題や解決プランを座学で研究する活動に切り替えた。6月以降はコンソーシアムの連携を強化し、テーマごとの地域学習実施支援員を招聘し、地域で活動が可能な団体の情報を得られるようにした。
- ・1年生の課題設定に際し、世田谷区の抱える課題を把握したうえで進められるよう、テーマごとに学習支援アドバイザーを招聘した。地域課題を把握する場面だけでなく、可能な地域活動をアドバイスしてもらうなど、コロナ禍で地域課題を生徒自身で探すのが難しい中で活動が広げられるように協力を得られた。
- ・コロナ禍で地域での実践が難しいことから、6月には高校1年向けに、運営指導委員でもある世田谷ボランティア協会理事で昭和女子大学特任教授の興梶寛氏による「サービスマーケティングとは」の講演会、9月には昭和女子大学教授天笠邦和氏によるスキル育成のためのオンライン講演を実施(先述)、コロナ禍で現地に行けない生徒の支援になるようにした。

C. グローバルプログラム (GP)

a) LABO 研究

「LABO 研究」は、SDGs の理念を軸に、キャリアデザインに資するより深いまたはより広い国際的課題から4つの研究テーマをとりあげ課題研究を行う活動である。活動は希望者による選抜で、高校1年の後期からスタートする。1年2年混合で4つのLABOに分かれ、企業や大学教員が指導を担当し、コミュニケーション力や多面的視点など、総合的な素養を育めるようにディスカッションやグループワークを実施する。

・LABO4 グループのテーマ変更

SGH から引き継いできたテーマは、今年度、高校2年生からの提案により変更を加えた。例えばLABO2「日本人女性のジェンダーギャップの研究」→「日本人のジェンダーギャップの研究」のように、性別にこだわらないポリティカルコレクトネスな視点が、生徒から発案された。

LABO1 : 次世代を担う私たちが考えるキャリアデザインの研究

LABO2 : 日本人ジェンダーギャップの研究

LABO3 : 海外で活躍する日本人リーダーの研究

LABO4 : 多文化共生とボランティアの可能性

・外部指導講師の講義等はオンラインで実施した。

・今年度の海外研修はコロナウイルス流行のためすべて中止となった。そのため、LABOごとに研修先の高校生や訪問予定だった外国の機関とオンラインで交流を行った。

・地域での活動や地域への提言に活動の重点をシフトし、グローバル事業でのコンソーシアムを活用し、地域での活動・発信を進めた。

LABO2による「ジェンダーかるた」作成と地域の児童への普及活動

LABO3による世田谷区の企業訪問

b) グローバルイシュープログラム (SDGs キャリア講演)

世界規模の課題に対する自分の意見をまとめる機会を設け、グローバルな視野を育み将来リーダーとなれる課題解決力、キャリアデザイン力などを身につけるため、SDGsを主テーマとしたキャリアや諸課題に関する講演を実施する。

・今年度の活動

11月24日: 「CM 炎上から見るジェンダーバイアス」

講師: 白河桃子 (少子化ジャーナリスト・昭和女子大学客員教授)

12月14日: 「プレゼンテーションの方法」

講師: 佐々木順子氏【安川電機/三井住友信託銀行取締役 元マイクロソフト執行役】

2月・3月: 国境なき医師団によるワークショップ

「現役高校生と考える、国際人道援助 ～私たちに何がきめるのか～」

2月13日(土) 「国際人道援助に挑戦する理由」

(国境なき医師団日本 事務局長 村田 慎二郎様)

3月13日(土) 「看護師が語る紛争地のリアル。自分だったかもしれない世界」

(国境なき医師団 看護師/リクルーター 白川 優子様)

D. 昭和キャリアビジョン

- ・高校3年での活動を充実させるため、総合的な探究の時間を1時間開設。
- ・これまでの自身の経験と学びをまとめて自己の将来像を思い描き、そこに到達するために踏むべきキャリアステップをまとめる活動を行った。

* 1年生の12月に実施予定の選択制海外研修旅行は、コロナウイルス流行のため事前学習も含めて次年度に延期となった。事前学習は昨年度の内容を改善し、SDGsの17項目を軸として宗教・文化、開発、共生などのテーマを各自で設定し、地域課題を深める過程に、課題の多面的な理解を促進する目的で位置づけるように計画中。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

- A. 高校1年生：総合的な探究の時間・ロングホームルーム（週2時間）
- B. 高校2年生：総合的な探究の時間・ロングホームルーム（週2時間）
- C. 高校3年生：ロングホームルーム（週1時間）

* 課外活動、現代社会(高校1年)でも関連活動を実施する。

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

A. 活動のクロス化と授業開発

- ・各教科の授業開発は本事業とのクロス化を進めるため、**think global, think local, act global, act local, thinking skill, active skill**、そしてSDGsの視点でスキル指標・内容指標を設定し、探究的な資質や能力育成のための授業と教材の開発を進められるようにした。
- ・SDGsへの理解促進のために行う「SDGs開発授業」は、座学にとどまらないアクティブ・ラーニングの観点で社会科が授業を開発し、小冊子にまとめ、実践の定着化をはかっている。
- ・今年度はオンライン授業の増加や協働学習の難しさなどから、授業開発数はあまり伸びなかった。こうした状況下での開発を進めたい。

④ 成果の普及方法・実績について

- A. オンライン文化祭(令和2年11月22日)でLABO研究の成果報告を配信。協力いただいた地域団体・グローバル指定校・アソシエイト校に通知)
- B. SGH・グローバル等カンボジア合同研究会(令和3年1月9日 和歌山信愛高等学校の主催でオンライン開催)
- C. 文部科学省主催「全国高校生フォーラム」(令和3年1月25日)オンライン発表会に参加。本校は協力校として生徒がBグループの司会を担当した。
- D. 総合的な探究全校発表会(グローバル探究成果発表会グローバル部門)(令和3年2月) LABO 成果発表
- E. グローバル探究成果発表会(ローカル部門)(令和3年2月16日)コンソーシアム関係者、区民などを招待しサービ斯拉ーニングの成果報告をオンラインにて開催。
*2月18日にはLABO研究の全校発表会を実施(地域関係者、研究関係者に通知)
- F. 国境なき医師団によるオンライン講演を令和3年2月・3月に実施。大学のネットワークを活用し、全国の関係校、世田谷区内の公立・私立高校に告知し、参加を募った。
- G. 学校公式ホームページに本事業の特設サイトを構築。取組の様子や記事を公開。

(3) 研究開発の実施体制について

- ① 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制
- ・カリキュラム・マネジメントは校長を顧問に、各教科や校務分掌で作成を進めている。今年度は教務部が各部門で作成した内容を取りまとめていく段階。作成した内容をもとに総合探究・グローバル事業と横断が可能な実践とのマッチングを行うのが次年度の目標である。
 - ・教科や探究の方法的横断機会の構築のため、中学校も含めた系統的なカリキュラムの構築を開始。学校のグランドデザイン策定や授業開発のため統一した指標を設定し、本事業とのクロス化を意識し、SWOT分析法などを用いて本校の課題や長所を可視化して中高6年を通じたカリキュラム・マネジメントを進めている。

② 学校全体の研究開発体制について

A. グローカル推進委員会

本事業の運営や進捗状況を管理し、各プログラムの成果検証や評価等について確認する組織として設置。校長、高等学校教頭、教務部長、学年主任、海外交流アドバイザー、管理機関担当で構成。月に1度開催し進捗状況の把握や討議事項を検討する。

B. 教育研究科

教務部に教育研究科を設置しプログラム開発の企画・運営を統括。グローバル担当とローカル担当を配置。グローバル担当は1年次 Think Global 部門と2・3年次グローバルプログラムを統括。各LABO担当と連携してカリキュラム開発を進める。ローカル担当は1・2・3年次のローカルプログラムの統括ならびに大学や区と連携した教材開発・調整を担当し、各学年主任と連携して開発を進める。

③ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

A. 進捗管理

- ・通常プログラムの進捗管理は教育研究主任が主導しカリキュラムの開発を進める。各部門は週に1回、グローバル部門は担当と教頭、教育研究主任、海外交流アドバイザー（カリキュラム開発専門家）、各LABO担当教員が、ローカル部門は担当、教頭、教育研究主任、各学年主任、管理機関担当（外部連携担当）が定期ミーティングを開催し、進捗確認と今後のプログラムの確認等を行った。
- ・各プログラムどうしの連携や事業全体の運営、各プログラムの外部との連携と成果検証、評価等についての監督機関として校内企画委員会（グローバル推進委員会）を設置（前述）。月に1度のペースで開催し（本年度はコロナ対応のため開催回数が減った）、全体を管理・確認する機関とした。

B. 成果の検証・評価

- ・サービスマーケティングは外部発表会（今年度はオンライン開催）の実施により協力いただいた地域団体からの評価を受けた。
- ・成果検証・研究改善のために1月末に運営指導委員会を実施。年度内の活動評価と次年度への改善事項の検討などを行った。
- ・活動前後にアンケート調査（生徒による自己評価）を行い生徒の意識変容をとらえるようにした。
- ・ルーブリックを生徒に提示し、生徒の活動について自己評価ができるようにするとともに、教員による評価も同じ指標で行えるようにした。ルーブリックは活動全体と発表用の2つ作成した。

④ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- A. 地域協働学習実施支援員やコミュニティサービス評価委員会との地域課題の共有
- ・昨年度からの課題であった「生徒自ら地域課題を発見すること」を実施するため、また、コロナ禍で地域での活動場所が縮小していることから、コンソーシアムで検討して地域協働学習実施支援員に、より地域での具体的な活動に従事している人材を選定した。世田谷区が抱える課題についての情報支援だけでなく、具体的な活動団体の紹介や調整などサービスラーニング全体で支援をいただけるような体制を整えた。
 - ・高校－管理機関－コンソーシアムの連携を緊密にし、産業振興公社等に相談・連携しやすい体制を整え、継続的な地域協働プロジェクトやコロナ禍にうまれた新たな課題をいち早く把握できるようにするなど、学校と管理機関・コンソーシアムとで地域が今抱えている課題に対応できる体制を整えた。
- B. コロナ禍で生徒の活動を確保するための取り組み
- ・地域協働学習実施支援員は地域連携で実績をあげている人材を新たに選定した。地域の抱える課題に触れられるボランティア先や実際に区内で活動する団体を紹介してもらえようアドバイザーとしての役割もお願いし、コロナ禍でも具体的な地域活動が生徒に紹介できるように対処した。

1 1 目標の進捗状況、成果、評価

目標 1 = いま世田谷区が直面する課題に敏感になり社会的・倫理的責任感、人間性を育成し、コミュニティと積極的に関わろうとする人材を育成する。

- ・コロナ禍で地域での活動は一時停滞したものの、地域協働学習実施支援員の協力により、地域課題把握のための活動や地域で可能なボランティアの実施は進みだしている。支援員の協力によって地域の人材の掘り起こしも進み、何らかの実践を通じて区内の団体・企業と関わることができたり、地域の方から話を伺う機会を、このコロナ禍であっても確保することができた。

目標 2 = 社会的な人材育成を行う探究活動プログラムを体系的に構築し、論理的に物事を考える能力を育成する。

- ・研究手法の習得をねらいとする AST (アカデミックスキルトレーニング) を 1 年次に実施。今年度は地域に出られず校内で活動できる時間が確保できたため、スキル育成のオンライン講演や、探究学習への意識づけのための「主体的学習者育成プログラム」、地域との協働意識を育む「協働的学習者育成プログラム)を実施した。
 - ・中高 6 年間での段階的な資質・能力開発のための探究プログラムを開発中。SDGs に関わる取り組みを進めたり、「総合で開発したいスキル・行動目標」を策定するなどして、中学と高校の間でスキル・内容両分野での系統性を高められるようにカリキュラムの策定を進めている。
- 教科間の横断的な授業開発、中高の探究活動の連続性を高める取り組みを効果的に運用させたい。

目標 3 = グローバルな取り組みと地域探究など諸活動をクロス化させることによって探究活動の質の高度化をはかり、総合的な学ぶ力を育成する。

- ・SDGs や探究スキル開発を軸として進める探究活動と各教科との内容・方法を横断する授業の開発は、目標 2 とも関わるが、昨年度作成した社会科の「SDGs 開発教育実践集」をもとに、中学でも実施して中高の活動のクロス化を継続して進めている。
- ・LABO 研究では今年度コンソーシアムと連携して世田谷区内での提言や実践、企業・団体訪問などを進めることができた。LABO2 では活動の成果物 (ジェンダーかるた) を業者に発注し、区内公立小学校等に普及させる活動を進めた。

目標4＝生徒の中に、地域のためにより有益な行動をしようとする意識を涵養していくために、恒常的な産官学連携・地域連携コンソーシアムを形成する。

- ・サービ斯拉ーニングでは、地域協働学習実施支援員の強化によって、コロナ禍であってもボランティア活動や地域での活動を世田谷区内で実施することができた。高校1年では後期からの活動となったがグループ内のほとんどが、何らかの実践を通じて区内の団体・企業と関わることができた。地域の方から話を伺う機会は、オンラインも含めるとその回数は増加した。
- ・昨年度から続いている世田谷区、世田谷区産業振興公社などの支援で始まった大型プロジェクト（しもきた商店街、世田谷区おもてなし実行委員会など）は、継続して進めている。東京オリ・パラに関わるイベントは延期となったが、生徒が独自の活動を企画するなど、生徒から発信して、活動を継続させている。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

・世田谷区が直面する課題に積極的に関わろうとする人材を育成

サービ斯拉ーニングを行う生徒が設定する課題に深みや地域性が見られないケースがある。これは隣の区や県から通学している生徒が多く、地元意識が薄いことが原因と考えられる。この地元意識を生徒の中にどのように形成し、地域の課題を自分事化させていくかを次年度の課題とする。

特に、コンソーシアムの人材開拓力を生かした地域の人材の掘り起こしを進め、生徒の地域意識の醸成、ローカルへの志向性をさらに進めたい。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、座学が中心となったが、次年度はコンソーシアムを活用し、高校1年生の段階で、世田谷区の課題を知る地域ツアーなどを実施し、世田谷区への理解や意識を促進させる活動を充実させたい。生徒と地域との間で活動をマッチングさせる機能の充実も今年度に引き続き進めていき、地域の関係団体との連携の緊密化を図りたい。

また、指定終了後を見据えて、地域とのつながりやコンソーシアムを恒常的な機関として用いていく基礎づくりを進める。

・高校3年生の活動のスタートと6年間の系統的なカリキュラムの確立

高校3年次の活動を本格的に実施する。活動からの学びを自己の進路や将来に結び付けていき、自らのキャリアデザインや進路決定に活かしていくことができるような教材開発を、進路指導部との連携のもとで進める。ポートフォリオによる生徒の学びの把握とスキル指標・行動目標の指標を用いた自己評価を継続的に活用し、生徒の学びが一過性のものにならないように工夫しながら、中高6年間を通して本校で育みたい生徒像を総合的・体系的に育成するプログラムを構築・運用する。

また、SDGsなどを軸とした教科横断的な授業の開発により、探究と教科とのクロス化を深める実践を行う。

・高大連携の充実化

併設大学がある環境を生かして、高大連携による取組み、企画をさらに充実させていく。今年度企画したような、大学企画による高校生向けのイベントや大学教員による高校生向けの授業などを実施する。また、大学のサービ斯拉ーニング専門施設(コミュニティサービ斯拉ーニングセンター)を高校生向けに開放し、活動先の開拓に役立てる。

【担当者】

担当課	昭和女子大学附属昭和高等学校	TEL	03-3411-5115
氏名	勝間田 秀紀	FAX	03-3411-5532
職名	教諭（教務部教育研究主任）	e-mail	n-sgh@swu.ac.jp